

インカルチュレーションの前提条件

古橋 昌尚

Preconditions for Inculturation

Masanao FURUHASHI

はじめに

この論稿は現代の教会の神学的課題であるインカルチュレーション（福音の文化的受肉）を推進してゆくために何が必要か、その前提となる条件を探ろうとするものである。他方で、これはインカルチュレーションの内容を示す条件づけを探る試みとは区別される。インカルチュレーションとは何かを定義する際の「規準」という意味での条件、あるいはインカルチュレーションを成立させる条件やその規準を設定しようとするものではない⁽¹⁾。現実において、インカルチュレーションが成立するための条件やその規準を設定することはむずかしい。仮にそれらを設けたところで、インカルチュレーションの可否、またはそのあたりはずれ、成功失敗を決定するのは更に困難であろう。むしろ、本稿は何をもってインカルチュレーションが可能となってゆくかを探ろうとする試みである。そうした前提条件を見極めることによって、逆に今日インカルチュレーション推進のために足りないところが照らし出されてくる。

また、今日インカルチュレーションの推進が停滞しているという現状を前提としながらも、逆にインカルチュレーションを妨げているものは何か、いかなる精神がインカルチュレーションを推進しようとする方向性に抗うのかを検討する。こうした精神、意識や傾きを意識的に修正してゆくことによって、インカルチュレーションに留まらず、教会がこのグローバル化時代の要請に応えながら生きてゆくための助けとなる。

1. インカルチュレーション推進の妨げ——グローバル教会へと向かう歩みのなかで

ジェラルド・アーバックルは、今日の世界でインカルチュレーション推進の妨げとなっている理由を三点挙げている⁽²⁾。そのうちの二点はロバート・シュライターの別の著作から引いたものである。第一に、神学者らの間に「いくつかの概念的な行きづまりを打開するための適切な方法論がなく」、またインカルチュレーションの実践者が「いつでも容易に用いることのできる道具がない」ということである⁽³⁾。第二に、教会が国際的にまた地域のレベルにおいて正式に「インカルチュレーションにおける妥当な実験を許可する」気がないことである。また、「継続的に使用するために成功した実験を認可する」意志がないからである⁽⁴⁾。

アーバックルはこの二点に加えて更に自ら第三の理由を挙げている。それは「息を吹き返した原理主義的な見方」にあるとする。即ち、「文化研究は福音宣教には重要ではない、それは時間の無駄でさえあり、必要なのはイエス・キリストが当時実践したように、福音を宣べ伝えることである」という考え方である。他方で、アーバックルは「インカルチュレーションは福音そのものに根源的な要請である」として、教会が諸文化と対話し、積極的に社会科学を援用しようとししない姿勢、また文化に対して相互的ではなく一方的な関係を保とうとする態度について「原理主義的な見方」とであると指摘する。「実際のところ、イエス・キリストは当時の諸文化に向けて話す際にきわめて敏感に対応した。インカルチュレーションの達人として、イエスは自らのメッセージが諸文化の『根源』にまで達する必要性のあること熟知していた。⁽⁵⁾」

こうした現代における今日の流れを前提として、アーバックルは文化人類学者として、インカルチュレーションの方法論の問題は、文化の意味をめぐる混乱であるとする。そこで文化の意味を明らかにし、「このポストモダンのグローバル化世界における文化の多面的な性格を描こうとする。そのうえでインカルチュレーションの意味と、なぜインカルチュレーションが福音にとって要請となるのかを説明する。さらに、数名の神学者によるインカルチュレーションについての見方を分析し、なぜ教会の権威者たちはインカルチュレーションを、言葉では応援するにもかかわらず、推進することに躊躇するのかについて明らかにしようとする。⁽⁶⁾」

また、ここで上記のインカルチュレーション推進の妨げとなっている今日の理由以外に、カトリック教会が伝統的に保ってきた精神性にして、その妨げに加担する傾きについても検討してみたい。仮に「砦精神」、「メンテナンスの論理」、そして「徒党意識」の三つを挙げてみたい。これらの精神と傾きについては、カトリック教会が第二ヴァティカン公会議を通して世界の教会となってゆくというコンテキストで、教会論において論じられる際によく取り上げられるテーマである。第一に、「砦精神」 *siege mentality* あるいは「ゲットー心理」 *ghetto mentality* であるが、これは自らの教会組織（共同体）を外敵から守る、外からの影響から組織を保護しようとすることに心をくだいて、周りに「砦を築こうとする精神」のことである⁽⁷⁾。第二に、「メンテナンスの論理」 *logic of maintenance* は、自らの教会組織（信仰共同体）の現状を維持するべく管理することに重きをおくものである。グレゴリー・バウムは、これをもって組織が本来的に創立された目的と使命に沿ってではなく、自らの維持にばかり心を砕く論理を言い当てている。この教会自らの「自己保持」よりも、教会が「ミッションの論理」 *logic of mission* に照らして、自らの活動と組織構造を決定してゆくよう示唆している⁽⁸⁾。第三に、「徒党意識」とは同じ価値と目的、同じ方向性もつ帰属集団の勢力を伸ばすことに労力を費やす傾きのことで、偏狭なグループ意識に基づく精神である⁽⁹⁾。シーゲルは宗教のもつ危険性として、優越主義と「徒党意識」（「グループ意識」）を挙げて、これらの弊害について具体例をもって説明している⁽¹⁰⁾。

これらの精神は本来的にカトリックの精神とは相容れない価値であり、キリスト教の営みや宣教においていつも警戒すべき心の傾きであり、そしてキリスト教と文化との関係においてもむしろ害を及ぼしうる、それゆえ避けるべき姿勢であると考えられる。従って、これらは単にインカルチュレーション推進の妨げとなる精神や傾きとしてとり上げられるばかりでなく、より広い展望において、教会が真の世界教会、グローバル教会として歩みを進めてゆく上での指針や方向性、その姿勢に根源的に関わってくる主題である。

2. インカルチュレーションの前提——問題化のプロセス

この章では、インカルチュレーションを可能にするための前提条件について論じてゆく。それは、逆に見るならば、今日までこうした条件が整わなかったためにインカルチュレーションの実践を妨げたり遅らせたりしてきたという経緯を示すことにもなる。従って、こうした条件の検討はインカルチュレーション推進の妨げの要因を指摘するものともなる。今日、歴史的意識の高まりや歴史批判的な方法を通して、インカルチュレーションの必要性が以前より明らかにされてきている。それが明確に示されたのがアジア特別シノドス（1998年）であった。それでも、さらに以下の事柄が整理されその理解を深めることによって、インカルチュレーションの推進を助けるものとなる。

インカルチュレーションを可能にするための前提条件として、仮に六つを挙げることができる。第一に、違和感の体験である。第二に、世への肯定的な見方を挙げる。第三に、多文化主義的世界観である。第四に、信仰の内容とその表現との区別である。第五に、福音とキリスト教の識別を挙げる。そして第六として、相対的なものと絶対的なものとの混同の回避である。以下にこれらの前提条件を一つずつ吟味してゆく。

2. 1. 違和感の体験——インカルチュレーションの出発点

第一に、インカルチュレーションを推進するため、またそれを可能とするためには、それが個人的な体験であれ集団的なものであれ、違和感の体験が前提となる⁽¹¹⁾。これは一つには自らの身を置く宗教やまたはその信仰共同体のあり方に対する何らかの違和感である。差異の体験であり、距離感の体験でもある。これは自らの宗教や信仰共同体に対する距離感だけでなく、共同体と社会や世界との間に現存する隔たり感覚の体験をも含むものである。それはイエスの教えと自らの信仰共同体、教会との間の距離感であったり、教会のあり方の現実と理想とのあいだに生まれる間隙であったりすることもある。ある意味で健全な差異の感覚の体験であると言える。こうした差異や距離、ぴったりと一致していないという体験が違和感という形をとって自らに迫ってくる。

この体験をさらに具体的に述べるならば、自らが身を置くキリスト教という宗教のあり方、あるいはその信仰共同体のあり方があまりに西洋的で、非西欧圏の者にはしっくりこないというものが挙げられる。これでは、福音を個別の地域や文化に伝え理解してもらうこともままならない。別言するならば、自らがその宗教や信仰共同体に身を置きながらも、そこにしっくりこない違和感を、または腑に落ちないものを覚え、他方で共同体の外側に対しても地域や文化が体験しているキリスト教に対する隔たりを感じながら生きているという二重の疎外の体験であると言える。

大切な鍵は、この言葉にされにくい「違和感」という体験をいかに吸い上げ客観化し、神学的問いとして昇華してゆくか、また教会がそれをいかに課題として取り上げてゆくかというプロセスにある。近年においてこれを見事に実現したのが、アジア特別シノドスでの提題であり、特に日本の代表司教による提題については高い評価を得た。このプロセスを踏んだ発題はいかに説得力をもつかについては、シノドスの流れそのものが証明している⁽¹²⁾。このように、インカルチュレーションという課題の問題化プロセス自体が「違和感の神学化」でもある⁽¹³⁾。この違和感の体験こそが、インカルチュレーション探究の出発点であり、これを無くしては、インカルチュレーションの必要性を訴えるにあたっても説得力に欠けることとなる。

この体験は自ら身を置く信仰共同体や宗教のあり方がどこかおかしい、しっくりとこないという現実の体験であり、その体験には何らかの否定性を含んでいる。その意味で否定性の体験と呼ぶこともある。他方で、その体験自体が「否定的」なものであるというわけではない。むしろ、あるべきものがそこにあるという欠落の体験、むしろその意味で健全なまがいのない違和感の体験であり、神学全般そしてインカルチュレーションの課題にとっては肯定的な探究のきっかけとなる。さらには、そこにこそあらゆる神学とその営み、その問いかけの出発点を見出す。この体験をないがしろにせず、それに正直であろうとすること、忠実であろうとする、さらにはそれを言挙げするところに、神学の営みとその問い直しの神髄がある。この体験が個人的なものであれ集団的な意識の高まりや成熟であれ、インカルチュレーションという教会のかつ神学の課題を探究する出発点になる。あらゆる神学的問いの場合と同じように、インカルチュレーションという神学的課題、司牧と宣教におけるテーマも、この否定性の体験、違和感の体験を前提とすることなしには説得力をもちえない。

2. 2. 世への肯定的な見方——今日化の要請

第二に、インカルチュレーションを可能とするための前提条件として、一般的なそして基本的な態度として世への肯定的な態度を挙げたい。インカルチュレーションとは根本的に教会の今日化について指し示すシンボルであると捉えてもよい。教会の今日化または現代化とは、教会が世界から乖離したり、あまりに遠くかけ離れたりしてしまっている故に、世界との相互的な作用が希薄になっているという現状を背景に、それ

を修正するために用いられる用語である。従って、この文脈にあってインカルチュレーションは、教会が世界との相互作用を推進しようというシンボルとして機能する。

ここで問題となる「世から離れる」という傾きに関しては、仮に肯定的な見方と否定的な捉え方との二つの面から考えられる。肯定的な見方においては、教会の伝統が自ら語ってきたように、聖と俗、聖職者と一般の信徒のはっきりした区別、世俗に対する否定的な態度、世からの逃避という理想や現象において現れている。例えば、「この世にあって、この世のものとならない」という一つの理念においてさえも、世に染まってはならないという世に対するなんらかの否定的な見方が含まれている。

他方で、今日長い歴史を通して培われた価値への反動として、特に第二ヴァチカン公会議（1962-1965年）における「世の再発見」を通して、「世から離れる」ことの消極的な側面が自覚的に捉えられるようになってきた。それはあらゆる次元や領域において現れてきている。「世の神学」はこの点を指摘したものである。世は第一に神が愛された対象である。それ故に、その贖いの対象として神が自らのひとり子を遣わされた。これは愛の故の派遣であり、愛の故の受肉であった⁽¹⁴⁾。ヨハネ福音書の一節に「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」（第3章6節、新共同訳）とあるように、第二ヴァチカン公会議はこのくだりを深く味わうよう促しているかのようである。第二に、世は神の贖いの対象である。それ故にこの世は神の働き場であり、恵みが注がれる場であるということである。

この神の愛の対象であり、働きと贖いの場であるこの世を「憎む」こと、別言するならばイエスに倣わないこと自体が、ともすると神のいのちとその働きそのものに逆らうもののように映る。この世も人間もその営みに対しても背を向け「憎」み、避けるべきものとして扱う世界観や人間論の歪みが指摘され、第二ヴァチカン公会議をとおしてこの世が積極的な意味をもつものとして「再発見」されはじめた。そうした人間の営み、文化や科学への見方が肯定的なものに変わってきたという点、また対話、具体的には世界との対話、諸宗教、諸文化との対話といった教会の目指すべき指向性のうちに、教会の態度そのものが新たに姿を現しはじめた。対話という姿勢自体、他者の肯定的な側面、学ぶべき点、尊重すべき観点のあることを認めた上で成り立つ態度であるからである。

ここ半世紀の間に教会でおこってきていること、その方向性の転換自体は、教会がこの世に対する捉え方や人間論の変化を前提に、それを指し示す形で方向づけられてきた。この世への肯定的評価や再認識は、教会の今まで歩んできた道をも、あらゆる領域と次元において、改めて問い直させる機会となっている。このようにインカルチュレーションとは世への肯定的態度を前提として、はじめて成り立つ提唱である。それは単に世に迎合することとははっきりと区別される。

世は神の愛の対象であり、贖いと救いの場であり、それ故に神の働き場である。より具体的には、神の愛の対象として、そのひとり子を遣わした対象であり場である。その世において、神のいのちとその意図を実現すべく、教会は神の秘蹟として派遣された使命を与えられている。教会は神の愛の対象にしてその救いと贖いの場である世において、神のいのちを実現させる秘蹟として生き、自らのミッシオ遂行をめざして歩んでゆこうとする。そうであるならば、その自己理解と世界観、人間観に照らして、世を否定的に捉えるという教会の見方には修正が必要となろう。これも各時代における歴史的な背景に負うものである。特に二元論とグノーシス主義の影響は、この点において教会とキリスト教の歴史を通して長くそして根強く続いてきた。

例えば教会が世に対してもつ関係の一端を表す用語として、「宣教」という用語が挙げられる。マイケル・シーゲルはその著書でミッシオ *missio* の翻訳でありながら今や定着したこの「誤訳」の変遷について論じている⁽¹⁵⁾。布教や伝道という用語ほどではないにしても、そこには相手の意向を意に介そうとしない何らかの一方的な方向性が感じられる⁽¹⁶⁾。「宣教」という用語はもともとミッシオ *missio* というラテン語から来

ている。英語のミッション *mission* という言葉は、教会が非キリスト教圏へキリスト教を伝えていくという意味としてほとんど普通名詞のように使われている。これは十六世紀以降に、即ちキリスト教がヨーロッパの植民地政策と重なり合って世界に広まってゆく時期に、この意味で使われるようになった⁽¹⁷⁾。

それに対して、今日、「対話」ということばが、教会の世に対してとるべき姿勢としてしばしば用いられるようになってきた。これは宣教、神のことばを宣べ教えるという一方的な姿勢以外にも、ミッシオのより広い意味が、即ち世に派遣され、世を愛し、世を贖う神の働きと使命にあずかるという人間のあらゆる次元への関わりにおいて見直されるようになったからである。

教会の世界観、特に世に対する態度は、それが救いをいかに、またどんな範囲として捉えているかにもかかわってくる。第二ヴァチカン公会議を通して救いは個人と来世に限られたものではなく、現世における共同体的社会的な次元での救いをも含むものとして捉え直されるようになった。この世を（それが最終的な目的ではないにしても）仮のものとしてではなく、より真剣に取り扱うという姿勢が大切であると考え。そこからこの世での救いをないがしろにしないという方向性が取られるようになる。これはある意味でイエスの福音の読み直しでもあった。

現にイエス自身も当時の「律法」の読み直しをおこなう。「聖書」の再解釈であるといえる。たとえば、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くしてあなたの神である主を愛しなさい」という「第一の掟」を、「隣人を自分のように愛しなさい」という「第二の掟」に結びつける⁽¹⁸⁾。この二つの掟を一つに結びつけたイエスの「統合」は当時としても、歴史に及んで今日をも活性化させる教えとして、私たちに迫ってくる。

以上論じてきたように、インカルチュレーションとは神のいのちと働き、その意志と使命とに鑑みたまときに、この教会の今日化を象徴し、世からの乖離、世からむやみに離れることを何かしら消極的な方向性と認め、むしろ世との交信や相互的作用を肯定し促進するという前提のもとに唱えられるシンボルである。世への肯定的態度がないとき、この世での人間の営み、科学や技術、学術や文化的営みへの信頼も薄れ、従って福音を諸文化に受肉する、あるいは福音と文化とを対話させるというインカルチュレーションのプロセスに自らの運命を委ねることも躊躇されるであろう。このように世に対して基本的に肯定的な態度があること、それがインカルチュレーションを推進してゆくための前提条件となる。

2. 3. 多文化主義的世界観——諸文化の尊重

第三に、インカルチュレーションを可能とするための前提条件として多文化主義 *multiculturalism* を挙げたい。この「インカルチュレーションと多文化主義」のテーマについて、または「多文化主義としてのインカルチュレーション」については別稿ですでに詳しく論じてきた⁽¹⁹⁾。そこでここでは、主にそれらの論考を追っていくつかの論点にふれながらインカルチュレーションの前提条件としての多文化主義について説明したい。

インカルチュレーションは本来、多文化主義という考え方を前提としてはじめて成立する課題である。多文化主義の神学は、「文化の多様性、文化の等価性、少なくとも等位性を前提とするものである。それは単なる文化移植、『文化変容』 *acculturation*、植民地主義や単一文化主義という原理による支配や征服、押しつけや破壊ではなく、各地域の文化が尊重され、敬意をもって扱われることをその基本的な姿勢とする。⁽²⁰⁾ 従って、教会の司牧と宣教、その営みにおいて、諸地域における諸文化が等しく尊重され、敬意をもって取り扱われながら、福音と絶え間なく相互作用をおこさせるインカルチュレーションは、この多文化主義の神学に基づくものである。

カトリック教会は、その公式文書において表れるとおり、ほんの二十世紀半ばまで概ね西欧文化の優越を誇る単一文化主義的な世界観を保持してきたと言ってもよい⁽²¹⁾。これをもって「宣教地」においてもキリスト教の中心的なメッセージ、即ち福音ばかりでなく、西欧文化そして西欧型キリスト教のあり方をもとすると絶対的なもの普遍的なものとして取り込んでしまったという歴史的経緯がある。ここから次第に、特に非西欧圏においてインカルチュレーションの必要性が唱えられるようになってゆく。このような歴史的背景において、多文化主義がインカルチュレーションの基礎にして前提となることが見えてくる。これについて、また別の論考からの文章をもって以下に説明してゆきたい。

多文化主義は文化の多様性、諸文化の等価性を前提とし、諸文化は互いに影響を及ぼしあい、変化するものであるという考え方に基づいている。文化は多様にして複雑で重層的である。文化の多様性と等価性を前提にしてこそ、インカルチュレーションの発想が生まれる。福音は単一の文化に縛られたり占有されたりするものではない。福音があらゆる文化において意味と妥当性をもちながら諸文化において花開いてゆくという考え方が前提となって、インカルチュレーションの考え方や原則も可能となる。それゆえ、多文化主義はインカルチュレーションの基礎として支える考え方となる。インカルチュレーションは、人間存在と分けがたく結びついている文化を等しく尊重し傾聴するという点においても、多文化主義そのものであると捉えることもできる。そこから教会の現代化や刷新というたえず自己批評的な姿勢も求められてくる。⁽²²⁾

多文化主義によって諸文化が相互に積極的な作用を及ぼしあう。それに留まらず、諸地域の教会同士がますます相互的に作用してゆくことにもなる。即ち、多文化主義の世界観においてはじめて、「あらゆる文化において表現をおびたキリスト教の諸要素が互いに刺激しあうようになる。多文化主義神学によって地域教会 local church と普遍教会 universal church とが相互的に作用しあい、地域神学が他の地域神学と地域教会、そして普遍教会を刺激しながら互いに豊かさを増してゆく。これがインカルチュレーションがそのヴィジョンとして目ざすところである。別言するならば、インカルチュレーションは単一文化主義に基づく神学からは生まれえない発想である。⁽²³⁾」

他方で、インカルチュレーションは人、モノ、情報、文化が国境を越えて自由に交流する地球規模化、このグローバル化の時代において、ともすると自らの文化や地域、国にあってナショナリスティックな傾向に向かう可能性を秘めていないとも言えない。また、インカルチュレーションがポストコロニアル批評を背景に論じられるときも同様であろう。ところが、インカルチュレーションは諸文化を等しく取り扱おうとする理念をもつ多文化主義を前提とするものであるならば、排他的で極端なナショナリズムには本質的に抗うものとなる。

2. 4. 信仰の内容とその表現との区別——ヨハネ 23 世とパウロ 6 世

第四に、インカルチュレーションを可能とする、または促進するための前提条件として、信仰の内容とその表現の区別がなされていることを挙げたい。

キリスト教が普遍的な宗教となろうとするならば、その歩みの過程において、キリスト教は世界中の諸文化による表現を帯びることになる。そうでないならば、そもそもキリスト教が諸文化に根づくこともなく、従って、普遍的な宗教となりえないことになる。また、教会が世界規模の教会、グローバルな教会となろうとするのであれば、多様な文化に開かれた信仰共同体となってゆくことが求められよう。

インカルチュレーションとは、福音が文化に受肉し、福音と文化とが相互的な対話を継続的に実践することである。そうであるならば、「信仰の遺産という古来の教義の本質をなすもの」と「信仰の遺産が提示される仕方」とは、即ち信仰の教えの内容とその表現方法とは区別されるものである。前者は変わらないにしても、後者即ち信仰の文化的表現に関しては文化の数だけあってもいいということになる。これは教皇ヨハネ二十三世が第二ヴァチカン公会議の開催の演説（1962年）において触れた区別である。またヨハネ教皇はその回勅『牧者の君』*Princeps Pastorum*（1959年）において、教会が多文化的文化の上に成り立ち、それぞれの文化は互いに同等であるという考え方を明らかにしていた。ここにおいて、すでに教会の文化的多元主義を確認していたということもできる。信仰の内容とその表現の区別は第二ヴァチカン公会議を通してその伏線となり、その結果として文化の多様性が明示され、それによって地域教会の大切さがさらに強調されることになる。その後、パウロ六世教皇が『福音宣教』*Evangelii Nuntiandi*（1975年）をもって、多文化的文化としての教会についての考え方を結実させてゆく。それはインカルチュレーションに関する神学的探究のための道を拓くことになる。

以上に見るとおり、この信仰の内容とその表現との区別は、福音があらゆる地域に文化的表現をもって育まれてゆくための前提条件となる。その区別は教会がグローバルな教会となり、その結果としてキリスト教が世界宗教となってゆくための条件ともなる。逆の見方をするならば、信仰の表現が単一化されたり、それが一部の文化に条件づけられたりする限り、福音の諸文化への受肉、福音と文化の絶え間ない相互作用をめざすインカルチュレーションの促進もむずかしくなる。

2. 5. 福音とキリスト教との識別——インカルチュレーションの目的の確認

第五番目のインカルチュレーションの前提条件は、福音とキリスト教の区別ができているということである。この両者を混同しているときに、宣教や司牧において、特にキリスト教と文化の問題にかかわるところで、西欧至上主義を通してキリスト教の西洋性を他文化においてさらに推し進めてしまうことになる。キリスト教のメッセージたる福音を伝える代わりに、キリスト教しかも西洋キリスト教、そしてともすると西洋文化を教え伝えることが、教会の使命であるという誤解を与えてしまうことになる。その意味でこの区別は肝腎なものとなる。

福音とキリスト教との区別という課題は、この論考の主題であるインカルチュレーションの前提条件の問題を越えて、より大きな問題、信仰共同体における核心的な教えの識別の問題、更には信仰共同体の歩みの方向性を左右することにもなる教会論の問題にもつながってくる。これは、信仰共同体の自己理解とその生き方とも密接に関係している。即ち、自らの信仰共同体の、あるいは制度的宗教の教えや教義を、福音たるイエスの教えよりも上位におくことになるという本末転倒が起こらないよう、また徒党意識やグループ意識が福音に従うことよりも優先されることがないように常に自らを諫めることが求められる。この徒党意識やグループ意識の問題は、教会が従来育んでいた砦精神 *siege mentality* やメンテナンスの論理の優先による教会の歩みとも直接的につながっている。この福音とキリスト教との区別という課題は、イエスとキリスト教、イエスと教会、それらの関係性における教会の自己理解と関係しており、その反映であると考えられる。教会は自らがあたかもイエスの教えや福音よりも上位にあるかのように振舞うという過ちに開かれていることを覚えておく必要がある。

この節での主要な点は、福音とキリスト教との区別自体が問題となるということではなく、この文脈においてはあくまでもインカルチュレーションの目的にして対象となるのは福音であるという点である。この点を誤ると、キリスト教のメッセージを諸文化に伝えたり、相互的に作用させたりする代わりに、キリスト教の非本質的な部分、即ち偏狭の一ローカル文化である西洋そのものをもたらす——それは間接的にはあつ

ても——ことにつながってしまう。これを修正するにはまた更に何世紀もの歳月を要することともなりえる。この点に関しては、さらに以下で詳述したい。

インカルチュレーションの目的はたして何であるのか。これが問いとして意識化されるとき、インカルチュレーションは何を対象とするものであるのかという問いに焦点があてられる。別言するならば、これはキリスト教のインカルチュレーションなのか、または福音のインカルチュレーションなのか。即ち、「キリスト教を」文化的に各地域に受肉することなのか、それとも「福音を」文化的に受肉させることなのかという問いが出される。

この問題は実はインカルチュレーションという用語が日本語に移される過程において、すでに斟酌されている。たとえば、インカルチュレーションは「キリスト教の文化内開花」と呼ばれることがあるが、これは理念としては悪くないが、足りない点も指摘されている。第一に、そこには受肉 *incarnation* というインカルチュレーションに核心的な神学的用語が含まれていないことである。第二に、この訳語は「キリスト教が」繁栄してゆくことの重要性が強調されているという点である。教会のミッションは、正確に述べるならば、必ずしもキリスト教を開花させることではない。この理念が先行するならば、宣教活動自体が、いわば物理的な「開花」を目指すべく方向づけられかねない。これは歴史に見るような領土の拡大、支配と覇権の伸張と密接に結びついてゆくことにもなる。

そこで、教会のミッションたる宣教の目的について改めて確認してゆくことが要求される。それをもとに、インカルチュレーションを捉え直すならば、それはキリスト教を単に広め各地域に文化的に受肉させるということではなく、あくまでもキリスト教の中心的な核でありメッセージたる福音を文化と相互的に作用させ、願わくはそれが実りをあげるように努めることであろう。「神の国」の建設と言い換えることもできる。他方で、最終的にキリスト教が開花するかどうかは結果の問題であり、教会が福音宣教の因子として「神の国」の建設に寄与することこそが核心的な使命であると考えられよう。それに対して、「キリスト教を」受肉する、広める、根づかせるという表現は、歴史的な文脈においては、どうしても「西洋文化を」普及させるという内容と重なりかねない。なぜならばキリスト教とはイエス・キリストを信じる共同体の実態、その営みと活動、信仰と教え、また人々の生活習慣、生業、さらには芸術、建築、絵画、音楽などの文化、政治と社会、歴史、その文明圏を含む宗教的営為の総体を指すものであるからである。

以上宣教の目的、その対象とするものを見極めてきたが、ここで改めてインカルチュレーションの対象についても確認する必要がある。それは一方で福音、他方で諸文化であり、インカルチュレーションは福音を文化的に受肉させる、あるいは福音と文化を相互的に作用させることである。あくまでもキリスト教がインカルチュレーションの対象ではないということを弁えることが求められる。従って、この節の主眼はキリスト教と福音との区別を強調すること自体にあるのではなく、むしろインカルチュレーションの目的は何か、その対象となるものは何であるのか、そして教会のミッションとは何か、宣教活動の趣旨はどこにあるのかを確認するところにある。キリスト教の負の歴史を繰り返さないためにも、インカルチュレーションの論議においてもその趣旨を離れずに吟味することが絶えず必要となる。インカルチュレーションの対象を福音とするのか、あるいはキリスト教とするのかによって、実はインカルチュレーションが本来的に目指す方向に沿うものとなったり、逸脱したりするという不思議がおこる。要は福音が単一の文化によって条件づけられないこと、教会が多文化主義に開かれていることが肝要であり、それがインカルチュレーションを促進する、または可能とする条件となる。

2. 6. 相対と絶対との混同の回避——相対なる文化の絶対化

インカルチュレーション推進のための第六番目の前提条件は、相対なるものと絶対なるものとを混同していないということである。または、偏狭なるものを普遍的なものととり違えていないということでもある。別言するならば、地域と普遍とを混同していないということでもある。

そこで、相対なる地域文化を絶対化することからくる弊害についてこれから検討してゆきたい⁽²⁴⁾。きわめて大雑把な表現に頼ることになるが、以下に信仰と文化との出会いについて簡単に辿ってみる。信仰が新たな文化と出会うとき、その文化は信仰の伝える救いのメッセージに触れてそれを受入れることがある。ある場合には、受け入れ条件が整っておらずに拒絶する。また、別の場合には、信仰が新たに文化と出会い、文化がその福音を受け入れ、それがまた別の信仰のあり方や様式を形成し、宗教や共同体、思想や神学として発展してゆく。ところが、伝えられた信仰のまとう文化的要素が必要以上にその信仰のあり方自体を方向づけると、新しい受入文化は、自らの信仰の文化的拘束性につまづくこととなる。

具体的に述べるならば、歴史的には西欧の文化、キリスト教と教会の西洋的なあり方は本来的には相対的なものでありながら、それが普遍的また絶対的なものとして取り扱われてきたという経緯がある。この現象は信仰共同体自らの文化の絶対化、又は共同体の単一文化主義（至上主義）的世界観から生まれてくる。いわば相対なるものを絶対化するという誤りに基づくものである。これは一つの文化からまた別の文化への福音の伝達という宣教活動において、また福音と文化との相互的作用において、自らの信仰の絶対化のみならず、それを育んできた相対なる文化を絶対化してしまうという傾きからおきるものである。さらにその一文化が普遍化されようとするとき、インカルチュレーションが問題化され、その必要性が叫ばれるようになる。ただし、自らの文化を絶対化するという傾向は西洋に限らずに、普遍的に開かれた現象である。人間とその共同体は文化的捕囚でもあり、なかなかその価値や枠組みから逃れることは容易ではない。グローバル化時代の共生や対話においては特にこの人間自らの狭さと弱さ、その限界をたえず思い出すことが求められよう。

現実にはキリスト教の歴史において西欧という地域を普遍化しようとする傾きがあるならば、それが教会の教えにおいても「普遍化しようとする神学」として反映されてゆく。そこで、この混同を避けるためにも、西欧は一つの地域であり、その文化的表現は普遍的なる価値を持つ必要がないという認識が要請される。それがないと、キリスト教は西洋的な表現をもったものに留まり続け、その因子である教会が世界の教会、グローバル教会となることを妨げることになる。この混同が、福音の諸文化への受肉、即ちインカルチュレーションの推進を妨げることにつながってゆく。

3. インカルチュレーションの課題の文脈化

前章を通してインカルチュレーションの前提条件を一つひとつ精査してきた。インカルチュレーションの問題はそれ自体について論じる場が必要であるが、他方でそれが教会と世界の相互作用、その流れのコンテクストのなかでテーマ化されてゆく経緯を省察することにも大きな意義がある。インカルチュレーションという課題が文字通り教会と神学、そして世界の動きにおいて文脈化される必要があり、なぜそしていかにしてインカルチュレーションの主題がハイライトされてきたのかについての検討が肝要となる。それによって、教会に欠けているもの、これから目指す課題が浮き彫りにされてくる。そうした課題はまた教会がグローバル教会として歩んでゆくための指針や姿勢にも関わってくる。そこで、改めてインカルチュレーションの前提条件をふりかえることで、この主題のコンテクストづけをおこなってゆく。

第一の違和感の体験をめぐる省察は、教会や宗教への距離感、隔たり、疎外の体験を通して、そこに欠落しているものを指摘し、その本来のあり方に沿って方向づけるきっかけとなる。具体的には、違和感の体験は教会の預言的批判や絶えず改革される教会、教会の真のアイデンティティーに基づく自己理解について省

察を与えてくれる。

第二の世への肯定的態度をめぐる検討は、教会がこれまでグノーシス主義や二元論の根深い影響のもとに、世に対して消極的な態度を育んできた経緯を照らし出す。そこから今日、教会がその態度を克服すべく、世と相互的に対話をつづけてゆくことの大切さを訴える。また、教会と世との関係、神と世界との関係についてあらためて見直しを促す。インカルチュレーションは世の救いをより真剣に考える教会の今日化を象徴し、世との交信を肯定し推進するシンボルとなる。

第三の多文化主義的世界観をめぐる考察は、従来の教会のこれまでの単一文化主義的世界観を照らし出し、教会が西欧至上主義によっていかに方向づけられてきたかを物語る。これに基づく世界観は諸文化との真の対話を妨げてきた。これをもって多文化主義は、いかに教会の現代化や刷新において健全な自己批判的態度が必要であるかについても教えてくれる。

第四の信仰の内容と表現の区別に関する省察は、教会が真のグローバル教会として開かれてゆく過程で、地域教会において、信仰が諸文化と対話を実践してゆくことの肝要さを浮き彫りにする。多文化主義の上になりたつ教会は、地域教会を通して諸文化と対話し、それに相応しい文化的表現を帯びながら信仰共同体を育んでゆく。また二十世紀後半の第二ヴァティカン公会議と『福音宣教』を通して、諸文化への開き、人間の営みに対する肯定的見方をさらに促した。

第五に、福音とキリスト教との識別に関する省察は、宣教の目的、そしてインカルチュレーションの目的が何であるかを改めて認識させる。多文化主義に開かれているインカルチュレーションは福音の受肉をめざすものであり、西洋キリスト教や西洋文化をそのまま諸文化に根づかせることではない。ここに教会の歩む方向性そのものが関わっている。

そして第六番目の相対と絶対との混同の回避についての検討は、宗教と文化との関係について再検討をするよう導くものである。キリスト教の歴史において、西欧という地域を普遍化しようとする傾きがあったが、これは教会がグローバル教会となることを妨げてきた。この傾きは相対なる文化を絶対化するところからきている。

以上、インカルチュレーション推進の前提条件を簡単にふりかえることで、インカルチュレーションの課題の文脈化をおこなってきた。これは当該の主題が単独で取り扱われるわけではなく、教会の世界との相互作用において、またキリスト教の歴史、教会の動きと流れなかで、あるいは教会論、宣教論、宗教論のコンテキストにおいて文脈化されながら論じられることを確認するものでもあった。この手続きによって、特にこのグローバリゼーションの時代、ポストコロニアル批評、文化や地域の重要性がますますハイライトされてゆくなかで、インカルチュレーションが教会論や宣教と司牧の中心において取り扱われてゆくべき課題であることが照らされてくる。

結び

以上、インカルチュレーションを推進するための前提条件を六つとり挙げて論じてきた。それらは、違和感の体験、世への肯定的態度、多文化主義的世界観、信仰の内容と表現の区別、福音とキリスト教との識別、そして相対と絶対との混同の回避の六つである。また、その前にインカルチュレーション推進のテーマとの関係で逆にそれを妨げている要因と精神についても簡単に検討した。そして、最後にインカルチュレーションという課題のコンテキストづけをおこなうことで、本論の簡単なふりかえりをおこなった。

最後にみてきたように、インカルチュレーションの前提となる諸条件の吟味は、単に教会と神学の一課題に留まるものではなく、教会の歩み、その歴史と自己理解、自らの使命や世界観（たとえば彼岸と此岸の関係）など、より広いテーマへとつながってゆく。この省察はインカルチュレーションの課題を歴史的な文脈に

において、あるいは世界の流れの中に文脈化するものである。インカルチュレーションが教会の理念にして、その歩みの姿勢、宣教の原則であるだけでなく、教会の現代化を推進するシンボル、そして教会の受肉化を方向づけるシンボルとしての姿が浮きあがってくる⁽²⁵⁾。そして、インカルチュレーションは教会の現代化にむけてとってつけた方針ではなく、キリスト教の中心的な教え、その諸秘儀の中心にある精神であり、神の救いの歴史とイエス・キリストの生涯を思いめぐらせるよう導くものである⁽²⁶⁾。

註

¹ インカルチュレーションとは何かをめぐって、その神学的要素、構成要素、そしてその機能を捉えるならば、以下のように簡潔にまとめることが出来よう。第一に、インカルチュレーションの神学的要素を抽出しようとする、以下の項目を挙げることができる。受肉（神の受肉、イエスの受肉、教会の受肉）、教会の文脈化、教会の現代化、文化への傾聴・尊重という姿勢、そして共同体による実施のプロセス、福音による文化への問い直しと文化の変容などである。（古橋昌尚「インカルチュレーション、技術か姿勢か？——インカルチュレーションの神学的位置づけ」『清泉女学院大学人間学部研究紀要』第1号、2004年、pp.20-21 参照。）第二に、インカルチュレーションの構成要素としては、以下の項目を挙げることができる。宣教のプロセス、教会の姿勢、文化への傾聴・尊重、教会の現代化、文化の変容などである。（古橋昌尚「インカルチュレーション、キリスト教の生き方」『人間学紀要』第32号、2002年、pp.202-213 参照。）第三に、他方でインカルチュレーションがいかに機能しているか、それが何であるかをめぐっては、次の項目を仮に挙げられよう。第一に教会の理念、第二に教会の歩みの姿勢、そして第三に宣教の原則、またはその方針にして方法である。（古橋昌尚「インカルチュレーションとは何か——用語、定義、問い直しをめぐって」『清泉女学院大学人間学部研究紀要』第6号、2009年、pp.15-30 参照。）

² Gerald A. Arbuckle, *Culture, Inculturation, and Theologians: A Postmodern Critique* (Collegeville, Minnesota: Liturgical Press, 2010) 166; "Introduction," xx.

³ Robert Schreiter, "Inculturation of Faith or Identification with Culture?" *Concilium* 2 (1994): 17, qtd. in Arbuckle, 166.

⁴ Robert Schreiter, "Faith and Cultures: Challenges to a World Church," *Theological Studies* 50 (1989): 758, qtd. in Arbuckle, 166; cf. xx.

⁵ Arbuckle, xx.

⁶ Arbuckle, xxiii.

⁷ T・ホーランド・サンクスは第二ヴァティカン公会議をもってこの「砦精神」 siege mentality の終焉を告げていると評価している。Cf. T. Howland Sanks, *Salt, Leaven, and Light: The Community Called Church* (Crossroad, New York: 1992) 143.

⁸ Gregory Baum, *Compassion and Solidarity: The Church for Others* (New York: Paulist Press, 1990) 42-43, qtd. in Sanks, 241.

⁹ マイケル・シーゲル『福音と現代——宣教学の視点から』第一巻 サンパウロ、2005年、pp.179-190 参照。

¹⁰ シーゲル、pp.181-183 参照。

¹¹ インカルチュレーションにおける「違和感の体験」と「否定性の体験」については、以下の論考を参照。古橋昌尚「福音の文化的受肉——自叙伝としてのキリスト教を目指して」『清泉女学院短期大学研究紀要』第19号、2000年、pp.75-78。

¹² 日本の代表司教による発題作成の経緯については以下を参照。古橋昌尚「インカルチュレーションの可能性——アジアの教会、日本の教会における神学的課題を探る」『文化的受肉（インカルチュレーション）の諸問題と可能性（2）——2009年度清泉女学院大学共同研究報告書』、清泉女学院大学・清泉女学院短期大学教育文化研究所、2010年、pp.51-74。アジア・シノドスと発題作成のプロセスに関してはそれぞれ以下を参照：pp.51-57、pp.52-53。

¹³ 「『否定性の体験』の神学化」に関しては以下を参照。古橋昌尚「インカルチュレーション、教会の『受肉』を問うシンボル」『清泉女学院大学人間学部研究紀要』第4号、2007年、pp.24-26。

¹⁴ ヨハネ福音書3：6。1：14 参照。

¹⁵ シーゲル、pp.32-38 参照。

¹⁶ シーゲル、pp.32-34 参照。

¹⁷ シーゲル、p.36 参照。

¹⁸ マルコ福音書12：28-34（新共同訳）。

¹⁹ 古橋昌尚「インカルチュレーションと多文化主義——福音と文化との互惠的対話にむけて」『清泉女学院大学人間学部研究紀要』第2号、2005年、pp. 25-38 参照。

²⁰ 古橋「インカルチュレーションと多文化主義」p. 30-31。

²¹ 教会が公式文書において文化の多様性を認め、更に文化的多元主義へと飛躍的に移行してゆく二十世紀半ばの経緯については以下の文献を参照。Aylward Shorter, *Toward a Theology of Inculturation* (Maryknoll, NY: Orbis Books, 1988) 183-187.

²² 古橋「インカルチュレーション、教会の『受肉』を問うシンボル」p. 29 参照。

²³ 古橋「インカルチュレーションと多文化主義」p. 31。

²⁴ 当該の節（「2. 6. 相対と絶対との混同の回避——相対なる文化の絶対化」）は以下の共同研究報告書の一部に加筆したものである。古橋昌尚「インカルチュレーションの諸問題」『文化的受肉（インカルチュレーション）の諸問題と可能性（1）——2008年度清泉女学院大学共同研究報告書』、清泉女学院大学・清泉女学院短期大学教育文化研究所、2009年、pp. 63-64; 71-72。

²⁵ 古橋「インカルチュレーション、教会の『受肉』を問うシンボル」pp. 22-23 参照。神学は本来的に規定的、又は規準的な学問 *prescriptive discipline* であって、叙述的に論述する学問 *descriptive discipline* ではない。あくまでも方向性を規定してゆくという学問である。ここからも、インカルチュレーションの定義、即ちある程度の叙述的な規定は必要ではあるが、神学のまたインカルチュレーション神学の指し示す方向性はむしろ規定的であると言える。

²⁶ 古橋昌尚「インカルチュレーションの諸モデル——キリスト教秘儀の類比から」『人間学紀要』第40号、2011年、pp. 101-126 参照。

（受付日：2012年2月7日）

SUMMARY

This paper clarifies the necessary preconditions for inculturation, the on-going dialogue between the gospel and cultures, especially in non-European cultural contexts. We can tentatively identify six requirements: (1) experiencing a sense of incongruity, (2) having a positive attitude toward life on earth, (3) embracing a multicultural view of the world, (4) differentiating between the content of faith and its expressions, (5) discerning the gospel from Christianity, and (6) avoiding the confusion between the relative and the absolute.

In addition to identifying these six requisite conditions that make inculturation possible, we can observe three ways of thinking present within the church that stand in the way of inculturation. Siege mentality/ghetto mentality, maintenance-over-mission mentality, and partisanship/group-centered mentality are all radically related to the church's direction, principles, and attitudes. Left unaddressed, these mentalities will prevent the formation and growth of a genuinely global church.

Lastly, we can contextualize several themes of inculturation, which have emerged from our examination of the six preconditions, within history, ecclesiology, missiology, and religious studies. Doing this leads us to recognize inculturation as integral to ecclesiology and pastoral mission. Inculturation as a missiological add-on cannot lead the church into the future.